

# 発達遅滞幼児のムーブメント教育 —グループ指導によるアプローチ法—

柳沼麻木\*・小林芳文\*\*

Movement Education for Young Children with Developmental Disabilities  
—Psychomotor Educational Approaches through Group Activities—

Asagi YAGINUMA, Yoshifumi KOBAYASHI

## SUMMARY

The aim of this study was to explore a method of psychomotor education by movement education through group activities for children with developmental disabilities.

The programmed group activities were given to 36 children with developmental disabilities, aged three to six years, from 1992 to 1993. 19 cases had Mental retardation (53%), 6 cases had the tendency of Autism (17%), 4 cases had Epilepsy (11%), 3 cases had cerebral palsy (8%), and 1 case had Down Syndrome (3%).

Individualized educational programs for each child were also provided through a year. Each child was evaluated by The MEPA scale (Movement Education Program Assessment). According to this scale it was divided into 3 groups. After-treatment we analyzed the developmental changes which occurred in cases.

We concluded that a method of movement education through group activities effected at developmental improvement for children who had different level of developmental disabilities. The group activities with mothers led to activities in home-based programs. This approach was provided by individualized educational programs. It gave better circumstances to children through group activities.

## I. 緒 言

発達遅滞幼児の教育（療育）に対する援助は、わが国でも公的機関において積極的に

---

\* 大田区こども発達センター (Ootaku Children Educational Center)

\*\* 特殊教育研究室 (Dept. of Special Education)

取り組まれるようになりつつある。乳幼児期の脳の発達、神経系の発達は急速で<sup>1)</sup>、先天的あるいは後天的障害の発達治療においても、早期発達期に適切な教育(療育)を行うと効果がある事が報告され<sup>2)</sup>、早期教育の重要性が指摘されている。特に、専門機関においては、単なる保育に留まらず、各専門スタッフが子供達の発達を包括的に捕らえ、かつ個人個人に適切なプログラムを提供することが望まれている。

大田区こども発達センターわかばの家(以下センター)では、昨年度の開設と共に、子供達の発達を全面的に援助するグループ指導によるアプローチ法として、ムーブメント教育によるプログラムを実施してきた。

ムーブメントによるプログラムは、運動を発達の軸と考え、子供達の全面発達を促し、ここを大切に作る人間尊重の教育である。運動によるアプローチは体性感覚と視覚経験を統合するとして、その有効性が早くから指摘されている<sup>3)</sup>。多様なムーブメント経験は、遊びや発達にとって重要な役割を演じ、その活動は、身体的、運動的、学習能力的、認知的、知覚的発達にも寄与する<sup>4)</sup>。

近年、運動を通じて、全面的な発達、特に子供の心理面も大切にするムーブメント教育を早期より教育(療育)に生かした実践プログラムが注目され、ダウン症児の早期指導<sup>5) 6) 7)</sup>に関する一連の研究では、子供達の発達に効果的な援助が出来る事が明らかになっている。また、ムーブメント教育はグループ指導を行う事により、対象児の様々な活動への動機づけが強まり、コミュニケーションスキルが高められるなど多くのプログラム効果が確認されている<sup>8)</sup>。さらに、グループ指導による感覚・運動を軸としたムーブメントプログラムは、子供達の身体像の発達、言語、認知面での伸びを認められるなど、集団参加に問題を持つ発達障害児の教育(療育)への有効性が示唆されている<sup>9)</sup>。

そこで、本研究は、ムーブメント教育を様々な発達課題を持った発達遅滞幼児に適用し、グループ指導によるアプローチ法で、有効な教育(療育)方法を探る事を目的に取り組まれたものである。

## II. 方 法

### 1. 発達センターの概略

大田区こども発達センターわかばの家は、平成4年度4月に心身障害児通所施設をして開設された。施設の目的は、発達の遅れや疑いのある学齢前の乳幼児に対し、早期に訓練、指導を行い、基本的な自立能力の育成を集団生活への適応能力を高める事である。通所事業は母子通所部門と単独通所部門から成り、母子通所はおおむね0歳から3歳の乳幼児が母子共に通所し、週2日、指導時間は午前10時から11時45分である。単独通所はおおむね3歳から学齢前の乳幼児で通所日は、週5日、指導時間は10時から1時50分である。

### 2. 指導対象児

平成4年度4月から1年間に、単独通所部門に在籍した乳幼児36名で、男子25名、女子11名であった。診断名はダウン症1名(3%)、てんかん4名(11%)脳性マヒ3名(8

%), 自閉的傾向 6 名 (17%), 発達遅滞 19 名 (53%), その他 3 名 (8%) であった。年齢は, 3 歳児 1 名, 4 歳児 10 名, 5 歳児 20 名, 6 歳児 5 名であった。

### 3. 指導日時

ムーブメント指導は, 毎週 1 回, 午前 10 時 30 分から 40 分間グループ指導で行われる。1 グループは, 約 10 名で, 1 年の指導回数は 1 人あたり約 32 回であった。毎月第 1 週は親子ムーブメント (親と一緒に取り組むプログラム), 第 2 週はフリームーブメント (センタースタッフと取り組むプログラム), 第 3・4 週は水泳ムーブメントを行った。

### 4. 対象児の発達状況

子供の発達の状態を把握し, 合わせて指導プログラムを作成, 指導グループのねらいを定める為, ムーブメント教育プログラムアセスメント (MEPA)<sup>10) 11)</sup>を対象児すべてに実施した。

### 5. ムーブメント教育における共通指導方針

ムーブメント教育における共通指導方針を各スタッフ, 親に伝え, 共通理解を持つよう努めた。スタッフとは, 年に 2 回, 一人一人の子供について, ケース会議を行い, スタッフ同士の共通理解と, 指導方針を検討し合った。また親子のプログラムを通じて, 母親とのコミュニケーションを大切に, 懇談, 研修会, など随時行なった。月 1 回, 子供達の様子や, 発達課題, ムーブメント教育の指導方針など書いた新聞を発行し, 共通理解を計った。ムーブメントプログラムの方針は以下の 3 点である。

- a. 身体運動機能の発達の軸に考え, 人間発達の基礎づくりをする。
- b. 個々の発達課題に応じて, 運動・言語・社会性といった人間発達全体から指導する。
- c. 子供の自発性を重視し, 喜び, 満足感に通じる教育を行う。

### 6. 対象児のグループ分けとねらい

子供達のプロフィールを参考に, グループを 3 つに分け, それぞれのねらいを絞った。MEPA によるプロフィール例は, 図 1 に示す。

グループ A: 感覚運動プログラム/身体像プログラム中心のグループ。各領域 (感覚運動・言語・社会性) の発達が 13 カ月から 18 カ月のグループである。このグループは, 感覚運動プログラムを中心に, 多様な動きや姿勢も変化を獲得し, 豊富な粗大運動の経験を増やす事が目標である。

グループ B: 感覚運動プログラム/コミュニケーションプログラム中心のグループ。このグループは, 運動感覚領域が 12 カ月前後の歩行確立ステージで, 言語・社会性が 19 カ月から 36 カ月のグループである。感覚運動領域では, 立位歩行に伴った抗重力姿勢の安定, 保護伸展反応, 立ち直り反応を引き出す。言語・コミュニケーション能力を育て, 運動感覚領域の課題への意欲につなげる事が目標である。

グループ C: 知覚運動プログラム/身体図式プログラム中心のグループ。運動感覚領域は 36 カ月から 48 カ月で, 言語・社会性が 12 カ月から 18 カ月のグループである。

# MEPA プロフィール表

— Profile for Movement Education Program Assessment —

No.

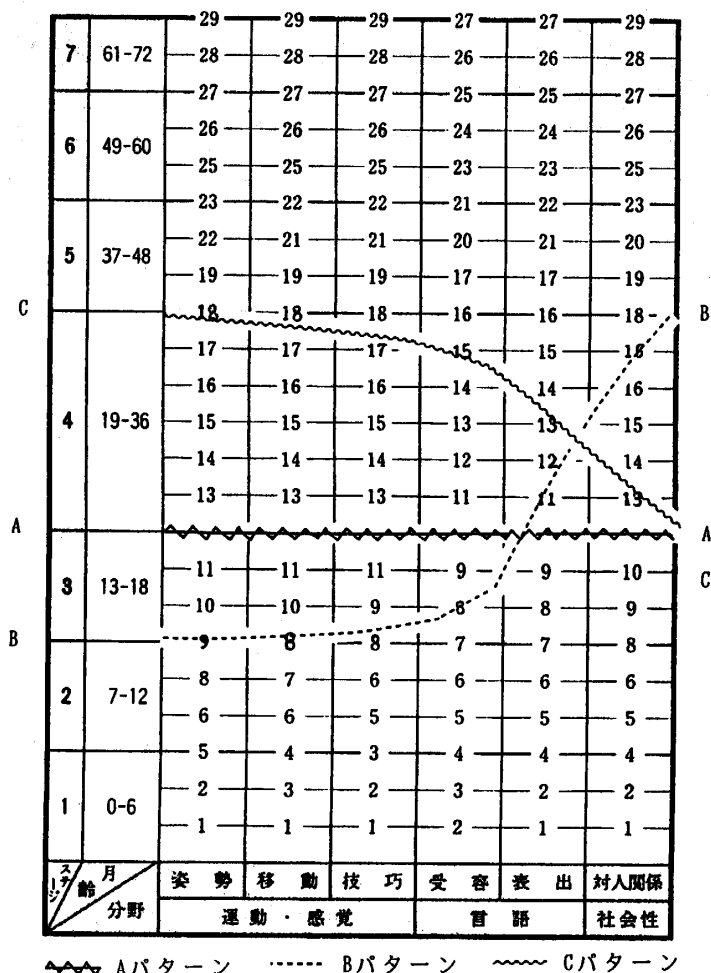


図1：MEPAプロフィール・パターン別にみたグループ分け

身体意識・空間意識の形成や身体協応性能力を高める。又、社会性を育て、集団適応する力を育てる事が目標である。

## 7. グループ指導プログラムの内容と配慮<sup>12)</sup>

### グループA

- a. 粗大運動を多く経験する。大型遊具（クローラー、エアートランポリン）など、快い揺れを体験し前庭感覚を刺激した。動作変化が引き出せるように、トンネル、サーキット、パラシュートなど用いた。
- b. 歌遊びや音楽を使い、タッピングなどで身体部位を意識させ、対人関係を深めた。
- c. 水泳では、身体を大きく使う事を心がけ、揺らし遊びや、スキンシップを多く取り入れた。

## グループB

- a. ボードやクローラー、トランポリンを利用して、様々な揺れや動きに対する身体の反応を引き出すプログラムを多くした。ゆっくりしたペースで、介助を最小限に止めた水中歩行などをし、本人が楽しみ、自発的に動きたくなるよう配慮した。
- b. 歌いながら、数を数え、膝立ちや立位を促したり、ごっこ遊びなどで意欲をひきだした。
- c. 水泳では、一対一で、水中をゆっくり歩いたり、フロートに乗って揺れを楽しむなど、楽しみながら、身体を動かせるように、時間をかけて、アプローチした。

## グループC

- a. 身体協応性能力を高める事をポイントにする環境を多く設定した。音楽に合わせて走る、数える、など模倣遊びやリズムを意識したプログラムを行った。
- b. ボール、フープ、ロープなど使用し、自分と物との関係の中から身体意識を育てるプログラムを取れ入た。
- c. 水泳では、ボール、フープ、フロートなどを使い、身体意識を高める運動を設定し、又皆で、歌を歌ったり、手をつないで回ったり、と集団で楽しめるプログラムを取れ入れた。

## Ⅲ. 指導例検討

子供達のプロフィールを参考に分けたA, B, Cの3グループの中から、各グループで、ムーブメントプログラムが効果的であった対象児1名ずつについて検討する。

対象児：S.T.男 s.62年12月5日生（入所時 4歳4カ月）グループA所属

## a. 各検査によるプロフィール

MEPA

図2

（5歳1カ月時）

K式発達検査

全領域1歳4カ月（DQ33）

遠城寺式乳幼児発達検査

全領域1歳7カ月（DQ32）

## b. 入所時の状態像

精神発達遅滞。平成元年7月より、保育園に通っていたが、言葉が出ないので、小児神経科受診。療育は、3歳6カ月時より、開始され、センター開設と共に、週5日、療育の継続指導を受ける。活発によく動くが、音に敏感で、耳塞ぎが多い。睡眠リズムが乱れると、機嫌が悪く、ぐずったり、寝込んでしまう。高い所を好み、端から端まで行ったり来たりする。描く事に興味が出始めている。名前を呼んで、手を差し出すと、走り寄ってくる。

## c. ムーブメント教育による指導の配慮と課題

ムーブメント教育における本児への課題は、①感覚・運動を促し、健康のリズムを整える。子供達の中での遊び、粗大運動の継続時間を伸ばす。②注視を促し、要求表現を引き出す。粗大運動を促しながら、声かけやリズムを意識的にはっきりと伝える事とし

た。

d. ムーブメント教育による指導の主な経過

前期（4月－7月）における指導の経過：トランポリンは、大勢子供がいるのが嫌いで、乗せても降りてしまう。機嫌の悪い時が多く、疲れて眠ってしまう事が多い。

中期（8月－12月）における指導の経過：どうやって乗ったらいいか分からなかったスクーターボードに腹臥位で乗るようになり、両手でフープを持たせると、しっかり握れるようになり、身体がピンと伸びる。引っ張られるのを喜ぶ。ロープを皆で持って引っ張ると、一緒に引く。トランポリンでは、他児が遊んでいても、両足跳びで友達と一緒に跳べるようになる。様々な種類の運動の要求が、はっきり現れ、他児が遊んで様子

			29	29	29	27	27	29
7	61-72		28	28	28	26	26	28
			27	27	27	25	25	27
6	49-60		26	26	26	24	24	26
			25	25	25	23	23	25
			23	22	22	21	22	23
5	37-48		22	21	21	20	21	20
			19	19	19	17	17	19
			18	18	18	16	16	18
			17	17	17	15	15	17
4	19-36		16	16	16	14	14	16
			15	15	15	13	13	15
			14	14	14	12	12	14
			13	13	13	11	11	13
			12	12	12	10	10	11
3	13-18		11	11	11	9	9	10
			10	10	9	8	8	9
			9	8	8	7	7	8
2	7-12		8	7	6	6	6	6
			6	6	5	5	5	5
			5	4	3	4	4	4
1	0-6		2	3	2	3	2	2
			1	1	1	2	1	1
27 月 齢	月 分野	姿勢	移動	技巧	受容	表出	対人関係	
		運動・感覚			言語		社会性	

氏名	S.T.児	性別	男	生年月日	S.62年12月5日生
第1回 評定	1992年7月24日	年齢	満4歳7カ月		
第2回 評定	1993年4月25日	年齢	満5歳4カ月		

図2：S.T.児のMEPA発達プロフィール

を見て、自分も遊びたい時は、指導者の手をひっぱるようになる。

水泳は、平成4年8月より、自然に水中に潜りはじめる。潜る時間は、次第に長くなり、足が水面近くまで、上がるようになる。

後期（1月－3月）における指導の経過：自分一人でも、遊具で楽しく遊べるようになったので、数を数えながら、トランポリンを揺らす。指導者の手につかまって、自分は高く跳ぼうとする様子が、見られるようになり、手を差し出すと、自分から駆け寄ってくる。1, 2, 3, のタイミングを身体で覚え、1, 2, と指導者が、声がけすると3のところで、わざと自分でトランポリンに転がる事が見られるようになる。身体模倣遊びが体幹に近い所から（肩を回す）、部分的に出はじめる。

水泳は、身体が水中で伸び、一人で起きあがるようになった。誉めると笑顔になり、何度でもやろうとする。

#### e. 対象児の指導後の状態

体力もついて、ぼんやりしている時間が少なくなり、泣いていても立ち直りが早くなり、遊び、興味が広がっている。平成4年9月より、おかわりのほしい時、はっきりと食器を差し出すようになり、平成5年2月、名前を呼ぶと、両手挙手して、ハイと発声が出る。大好きなトランポリン、水泳、すべり台など、成功した時は積極的に誉めた結果、誉めるとうれしそう表情が指導者に伝わるようになる。母親に誉められと、うれしくて発声がある。友達の動きを追うようになり、自分のおもちゃも、とられっぱなしだったのが、引っ張り返すようになった。細かい物の注視は不安定だが、クレヨン描きが30分継続する。

対象児：A.K男 s.62年12月5日生（入所時4歳4カ月）グループB所属

#### a. 各検査によるプロフィール

MEPA 図3

（5歳1カ月時）

遠城寺式乳幼児発達検査 全領域1歳3カ月（DQ25）

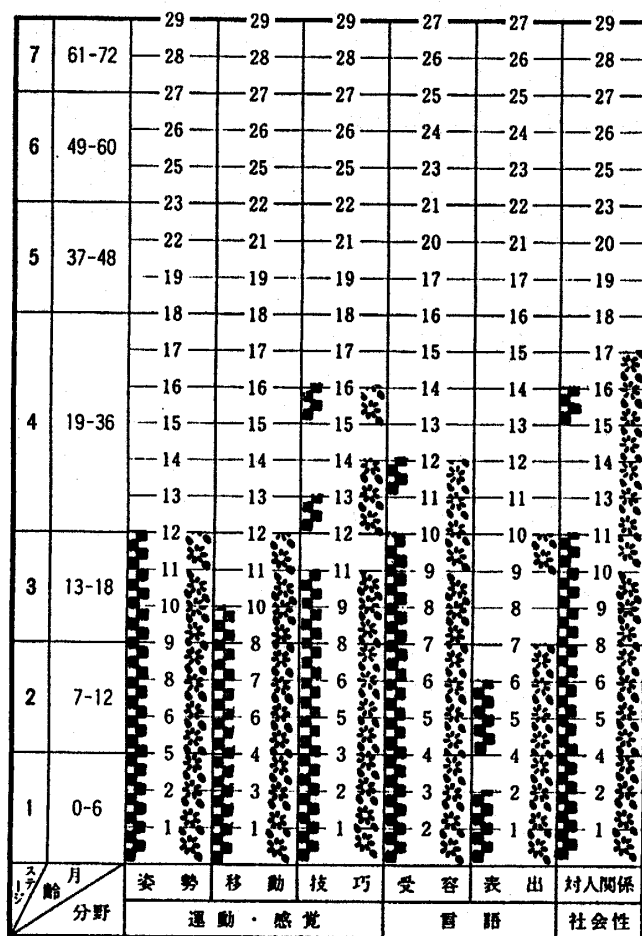
#### b. 入所時の状態像

高乳酸血症。1歳8カ月けいれん発症。てんかん、脳性マヒ。始歩3歳9カ月。

独歩可能だが（20歩程度）、不安定でころびやすい。階段は要介助。トランポリン、揺れの遊具、など身体が揺れたり、不安定な状態になるものは、非常に恐がる。要求表現は、はっきりしており、指さしや、声（アーアー、オーオー）です。身近な事物の名称は、理解している。身体模倣は部分的にある。母親との分離不安が強く、少しでも顔が見えないと、激しく泣く。個別指導（PT, ST, 心理）は、不安の為か拒否する。

#### c. ムーブメント教育による指導の配慮と課題

情緒面で不安定になると、プログラムに参加出来ない。身体の揺れるもの、粗大運動には、心理的な不安や恐怖心が強い為、時間をかけて、環境に慣れ、少しでも参加するところから、アプローチをはじめる。本児は、コミュニケーション能力が良いので、グ



氏 名	A.K.児	(男) 女	S.62 年 12 月 5 日生
第1回 評 定	1992 年 7 月 24 日	年 齢	満 4 歳 7 カ月
第2回 評 定	1993 年 4 月 25 日	年 齢	満 5 歳 4 カ月

図3：A.K.児のMEPA発達プロフィール

ループ指導の中で、意欲を十分に育て、それを、運動の課題に生かせるように留意する。課題は①揺れに慣れる。②身体を動かすのは楽しいという気持ちを育てる。③立位の安定、バランス反応の促進、右手の参加を促す。

#### d. ムーブメント教育による指導の主な経過

前期（4月－7月）における指導の経過：グループで、何人かの子供達が、トランポリンに乗っていると、恐くて乗れない。誘うと絶対の拒否。何もせず、座り込んでいる事が多い。多動傾向の子供のグループを避け、ゆっくりしたペースで取り組めるよう配慮する。



中期（8月－12月）における指導の経過：小人数なら、揺れても嫌がらなくなる。本児の気持ちのほぐれる、遊び歌を多く取り入れたり、母親と一緒にトランポリンに乗ったりするなど、丁寧なアプローチを心がける。皆で輪になり、歌を歌うと、一緒に手をつなぎ、立位が保持出来る。身体模倣の音楽遊びをよく見る。パラシュートに乗せたり、風船や紙吹雪で遊ぶなどするうち、表情が和らいでくる。呼名すると、返事する。自分から、トランポリンの上の風船をとろう事が見られはじめる。しかしまだ動きの方向性に身体のバランスがついていけない。上下方向の刺激に不慣れ。

後期（1月－3月）における指導の経過：トランポリンに乗せても、一人で楽しそうに乗れるようになった(座位)。他の子供達と乗っても、心理的不安がない様子。自信がついてきて、母や見ている人に余裕の笑顔を見せ、手をたたいたりするようになる。独歩の距離が伸びて、部屋や玄関など、センター内の移動や、外でも母の自転車まで、バランスを取りながら、歩いていくようになり、自力歩行の機会はぐっと増える。支えのある所まで自力で移動し、つかまって立ち上がる事が可能になる。人に自分の方から手を出し、捕まえようとしたりして、関わりとよく笑う。バランスが崩れて、ひっくり返っても、精神的に立ち直りが早くなる。立位、特に下肢は不安定。まだ、合図を皆に出したり、サインを出すのは、恥ずかしいのか、不可。

#### e. 対象児の指導後の状態

風邪をひいても休まず、直ってしまう事が多くなる。要求表現の音声レパートリーが広がり、ア－ア－から、バーバーも聞かれる。母親に笑顔で手を振って、見送るなど、運動面の成長と共に、精神的な成長が著しい。

対象児：S.Y.男 s.63年12月22日生（入所時3歳3カ月）グループC所属

#### a. 各検査によるプロフィール

MEPA

図4

（4歳2カ月時）

K式発達検査

全領域2歳9カ月（DQ70）

遠城寺式乳幼児発達検査

全領域3歳1カ月（DQ72）

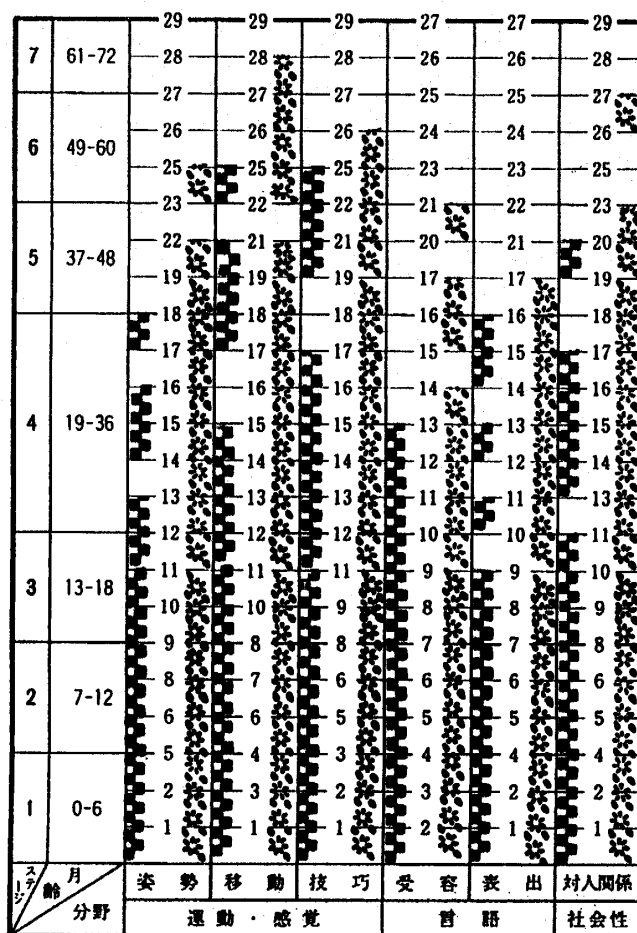
言語発達遅滞検査

理解2歳5カ月・表出2歳5カ月・動作性認知2歳11カ月

全領域2歳6カ月

#### b. 入所時の状態像

精神発達遅滞。自分の興味ある本や操作玩具で遊ぶ。子供に興味があり、他児の名前を呼んだりするが、実際は大人との関わりが多い。日常生活は、注意散漫になった時、声がけで援助すれば、食事、排泄、着替えなどだいたい出来る。物の名称は理解していて、単語レベルでの発語がある。大小、色（赤のみ可）は分からない。身体部位は手、足を理解。図形の弁別は良好で、トンネル構成、可。丸は、模倣して描ける。階段昇降は、独歩だが、不安定で1段ずつ両足をそろえて昇降する。片足立ち不可。リズム遊び、身体模倣は、好きでよく見ている。揺れの遊具やトランポリン、巧技台、プールなど自



氏名	S.Y.児	性別	男	生年月日	S.63年12月22日生
第1回 評定	1992年7月24日	年齢	満3歳6カ月		
第2回 評定	1993年4月25日	年齢	満4歳3カ月		

図3：S.Y.児のMEPA発達プロフィール

分から、取り組む事はなく、恐がる事が多い。指導者が誘うと、10cmの平均台は、一人で渡れる。三輪車に乗れる。

#### c. ムーブメント教育による指導の配慮と課題

運動経験が少ないせいか、くぐる、またぐ、跳ぶ、など嫌がる事が多く、積極的に取り組まない。特に段差をこわがり、跳ぶ事を避け、またぐ事が多い。本児は心理的な面での配慮が重要と考え、きっかけを作り、時間をかけてアプローチする事とする。課題は①快い運動経験を増やし、自発的な運動を促す。②段差の跳びおり、両足跳びを促す、運動と言葉の指示を連合させ、動作語の理解を促す。③視知覚の課題(大小、色の弁別)。

#### d. ムーブメント教育による指導の主な経過

前期（4月－7月）における指導の経過：プログラム中、走り回っているが、他の運動には、興味が向かない。水泳では、水が恐くて、プールヘアプローチの階段で、座ったり、立ったりしている。指導者が誘うと、嫌がる。プールサイドを行ったり来たりして、少し水に入ろうとするが、すぐ出てしまう。少し水に入ったが、あやまって転んでしまい、再び、プールサイドにいる時間が多くなる。

中期（8月－12月）における指導の経過：エアートランポリンの脇に1mの巧技台を設定する。同じグループの子供が、よじ登って、飛び降りる様子を見て、本児も昇ってきたので、励ますと自分から飛び降りる事が出来る。これがきっかけになり、「跳ぶ」事に対して、自信がつく。

親子ムーブメントのプログラムの日、母に1mの巧技台から、飛び降りるのを見せ、母が感激して誉めたので、粗大運動へ動機づけが増す。

音楽ムーブメントでは、ピアノに合わせて、止まったり、走ったり、早く、遅く、など表現出来るようになる。身体部位（頭・肩・膝・お腹など）の課題の入った模倣が確実になってくる。

フリーの時間には、自分から、追いかっこや、振り回し遊びを要求するようになる。

水泳では、ダイビング用のフィンが気に入って、足にはいて、手すりにつかまりながら、水深50cmの所を歩くのを、おもしろがるようになる。指導者が誘うと、小さなボールを、投げたり、水しぶきをたてる事を模倣して、遊べるようになる。友達や指導者と、手をつないだり、フープをまたいだりする事も時々参加するようになる。フロートの上に乗る事は、まだ恐いらしく抵抗があった。

後期（1月－3月）における指導の経過：マットの上でも巧技台でも平気で飛び降りたり、ジャンプするようになる。指導者が合図と一緒に跳ぶように促す。大勢で、跳んだり騒ぐのは好まず、はずれる事がある。階段昇降は、独歩で手すりなしで可能になる。

水泳では、声かけすると、水中で抱かれても拒否が見られなくなつ。「足を伸ばして」、「バタバタして」、「力を抜いて」などの声かけに従って、身体を動かせるようになってくる。担当の指導者に自分が浮く（要介助）ところをみてほしい、という要求が出てくる。皆で輪になり、「だるまさん」の歌を歌いながら、ブクブクパッをすると、模倣するようになり、自分一人でもさかんに鼻の下まで顔を水につけようとする。フロートに乗って、揺らしたり、バランスが崩れても、恐がらなくなる。

音楽ムーブメントでは、音楽が止まると動きも止まって、指を出し、数が数えられるようになる。追いかっこを楽しめる時間が継続してきた。「ヨーイドン」「止まれ」など、はっきり言葉が出てくる。

グループプログラムの中では、集団の動きをよく見て、模倣し、プログラムと一緒に楽しめるようになるなど、適応力がついている。

#### e. 対象児の指導後の状態

遊びの中で、「大きい」「小さい」を意識するようになる。形や色にも興味が出ている。

休んでいる子供の事を「○ちゃん、お休み」と、2語文で言う。日常生活の中では、2、3語文が増加しており、助詞の使用が始まる。子供同士の関わりが増え、笑い合ったり、他児にたたかれたりして、泣いた後の立ち直りが、早くなる。

#### IV. 結 果

以上のようなムーブメント教育による指導を1年間継続して行い、MEPAのプロフィールにおいて、個々の子供の成長を確認した。個々の子供達の発達の様相は相違しているが、1年を通じて、運動を嫌がる子供が減少し、それぞれに成長が認められた。ムーブメント教育によるグループ指導の成果として次のようにまとめた。

- a. 各グループによる指導を取り入れた事で、様々な障害を持つ子供達の指導が可能になり、子供の全面発達を促す事が出来た。
- b. グループの中でも個々の発達課題を明確にする事により、グループの中の個別指導という子供にとって理想的環境が設定できた。
- c. 親子でプログラムに参加する時間を持った事により、家庭内での有効な教育的援助と継続指導が可能になった。

#### V. 考 察

ムーブメント教育によるプログラムは、従来行われていた体育指導と異なり、各領域の専門家（PT. OT. ST. MT. 心理. 保母. 医者. 看護婦など）が、それぞれの子供達の知識や評価を特定の分野でのみでの援助として捕らえるのではなく、子供の全面的発達（運動・言語・社会性など）を促す為のプログラムである。専門機関では、それぞれの領域のスタッフが、豊富な経験と専門性を持っているにもかかわらず、子供達の評価や、指導経過を交換して、子供の教育（療育）に生かしていない場合も多い。しかし専門的な機関においては、それぞれのスタッフが、お互いが協力、理解し、子供の全体的な像をつかむ事が大切で、センターにおいては、ケース会議や打ち合わせを通じて、子供達一人一人について検討してきた。その結果、子供達の様々な発達の様相が包括的に把握出来、ムーブメントプログラムに生かす事が出来た。幼児期の運動機能の発達と精神発達は、本事例においても、密接な関係が示唆され、小林(1987)<sup>13)</sup>は、幼児の運動機能の発達をとらえる際、精神運動機能という概念を提案している。発達遅滞幼児においても、精神発達と運動発達を不即不離の関係として、全面発達を援助していく事は、重要であると考えられる。

さらに、対人関係・言葉などを指導の目標に含めるグループ指導を行う事で、1対1の訓練プログラムで得られなかった、集団のもつ力を子供達の発達に役立てていく事は、心にも大きな成長をもたらす。発達遅滞の子ども達にとって、探求と遊びに対する子どもの要求を育て、人間関係の為の要求を満たす教育（療育）は、大切にされなければならない<sup>14)</sup>。集団の持つ力が生かされると、子ども達に運動を制御させたり、一般の行動を制御させたりする、自己制御を促進出来る。自己制御を助長するために興奮的な活動と

活発な活動の間に、静かな集中を必要とする活動を入れるプログラムの必要性が指摘される<sup>15)</sup>が、子供の自発性を重視し、喜び、満足感に通じるプログラムでなければ、子供達は、プログラムに積極的に参加出来なかった。

一方、グループ指導は、個々の発達の原理を基本にし、成熟度に即して運動の発達を促す事が望まれる<sup>16)</sup>。またグループ指導の中の個別指導においては、MEPAによる発達評価を個々に行い、発達パターン別にグループ指導を行なった事で、目標が絞れ、適切な環境設定をする上に意義があった。同じ課題を持つグループでの、指導は、効果が大きく、特に、運動に慣れていない子供は、グループの環境設定で、意欲が左右される事が考えられた。センターから、保育園や幼稚園に卒園していった子供達は、今後、統合保育という形で集団指導を受ける事になるが、一般児のグループの中でも、発達遅滞幼児の個々の発達を評価し、課題に合った環境を設定していく事は大切で、専門機関から統合保育の場にも生かされてほしいと考える。

単独通所部門において、敢えて親子のプログラムを月1回行い、母親とのコミュニケーションを大切にし、懇談、研修会、など随時行なったので、家庭との連携がとり易く、双方が理解し合えたなどの多くの有効性が示唆された。発達遅滞幼児は、初診で言葉の遅れや自閉的傾向が指摘される例が多い、従って親の教育的興味も言葉の指導や多動傾向への心配に片寄せられ、多く見受けられる。言葉の遅れは、様々な原因で起こるが<sup>17)</sup>、多くの場合、全体的な発達の遅れを見逃すわけにはいかない。しかし多動傾向や、言葉の遅れに捕らわれ、協応性の問題や、運動経験の必要性を見逃してしまう。母親は、正常児の遊ばせ方を知っていても障害のある子供の遊びを援助する方法を身につけるのは、むずかしい。子供達は興味がないので遊ばない、運動は嫌いだから遊ばないと思われがちである。慣れたパターンの決まった遊びから、感覚・運動を通じて感覚を刺激し遊びを広げていく事の重要性は子供の発達に大きく寄与する<sup>18)</sup>。発達遅滞幼児に関わる者は、子供達のより良い環境を設定するように、配慮し、その世界を広げていくように働きかける事は子供達の発達を促すのに、重要な要素である事が、事例からも示唆された。合わせて、母親同士が、子供の成長や、遊びの環境づくりについて、話しあったり、理解しあったりする場をプログラム終了後に持つ事が有意義だと考えられた。今後は、プログラムの中で、母親や家族とのコミュニケーションを大切に考えてゆきたい。1年間のプログラム終了後、卒園児の親が自主的なムーブメントサークルで活動する運びとなったのは、指導者にとって喜びであった。

#### 参考・引用文献

- 1) 宮本茂雄・林邦雄 (1981): 発達と指導 I 身体・運動. 学苑社
- 2) Anderlik, L. (1981): Klinische Sozialpädiatrie. (山下文雄訳「発達の視点から見た障害児の療育」, 医学書院)
- 3) Ayres, A. J. (1972): 感覚統合と学習障害. (宮前珠子訳), 協同医書出版社
- 4) Winnick, J. P. (1979): 子どもの発達と運動教育. (小林芳文訳), 大修館書店
- 5) 小林芳文・石川郁子, 他 (1985): ムーブメント教育法によるDown症児の早期指導. 横浜

- 国立大学教育紀要, 第25集, 253-269
- 6) 石川郁子・小林芳文 (1988): ダウン症乳幼児の早期指導, -ムーブメント教育適用による4年間の経過-第35回日本小児保健学会発表講演集, 456-457
  - 7) 飯村敦子・小林芳文 (1992): ムーブメント教育によるダウン症児への早期教育に関する研究, -感覚運動プログラムの実践-第30回日本特殊教育学会発表論文集, 146-147
  - 8) 石川郁子・飯村敦子・小林芳文 (1992): ムーブメント教育によるダウン症児の指導, 横浜国立大学教育紀要, 第32集, 242-261
  - 9) 西田寿美・他 (1992): 集団への参加に問題をもつ発達障害児の療育について, 発達障害研究, 第14巻, 第2号
  - 10) 小林芳文 (1986): MEPA・ムーブメント教育プログラムアセスメント, 日本文化科学社
  - 11) 小林芳文 (1986): 乳幼児と障害児の発達指導ステップガイド, 日本文化科学社
  - 12) 小林芳文 (1988): 幼児のためのムーブメント教育実践プログラム, コレール社
  - 13) 小林芳文 (1987): 精神薄弱児の身体協応テストの開発, 横浜国立大学研究紀要, 27, 207-220
  - 14) M. Frostig (1981): 人間尊重の教育, (伊藤隆二他訳), 日本文化科学社
  - 15) M. Frostig (1977): ムーブメント教育, (小林芳文訳), 日本文化科学社
  - 16) Arnheim, D. D. (1879): 不器用な子どもの運動プログラム, (永田盛訳), 西村書店
  - 17) 前川喜平 (1990): 臨床小児神経学, 南山堂
  - 18) Ayres, A. J. (1979): 子どもの発達と感覚統合, (佐藤剛訳), 協同医書出版社